

(川内市中郷町字計志加里)

位置と環境

遺跡は鹿児島本線川内駅から北西側へ約2.5kmの位置の台地に所在している。台地の標高は、約15mであり、浅い迫を隔てて南西側には薩摩国府・国分寺跡が所在している。

調査の経緯

調査は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い県教育委員会が、平成12年度（2000）に確認調査、平成13年度に本調査が実施された。調査は路線幅に従い約11m幅で、約600mの距離にわたる細長いもので、調査面積は約5,900㎡であった。

遺構と遺物

調査の結果、本遺跡は縄文時代早期、縄文時代晚期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代の複合遺跡である。特に、縄文時代晚期と平安時代の遺構・遺物が多く発見された。

縄文時代晚期は、黒川式土器の浅鉢形土器や深鉢形土器のほか県内では希少な壺形土器も出土した。石器は、石鏃、打製石斧、スクレイパー、石錘・楔形石器、磨石類、石皿などが出土した。

平安時代の遺構は、掘立柱建物跡7棟、竪穴状遺構2基、円形周溝墓、土壙墓3基、各種の土坑などが発見された。このなかで円形周溝墓は、直径8mを越える九州でも規模の大きなものであり、周溝内からは葬送儀礼に使用したと推定される土師器の坏・埴・皿などの食器が出土している。また、1号土壙墓では、墓の直上から供献遺物と考えられる土師器の埴のほか、底部には麻の平織りの布に包まれた刀子と、平織りの平絹に包まれた青銅製品が出土し注目された。

一方、土坑のなかには、完形の坏や埴が3点ずつ入った土坑が3基検出されている。



第1図 計志加里遺跡の位置

出土した遺物は、平安時代の土師器（坏・埴・皿・蓋・鉢）、須恵器（坏・蓋・甕・壺）のほか、越州窯青磁や紡錘車などもみられたほか、奈良時代の坏と蓋も出土した。須恵器の蓋には、墨が付着し転用硯とされたものも数点出土している。そのほかに国分寺などに使用される古代瓦も多数出土している。

中世の遺構は、多数の古遺跡や溝状遺構が検出され、滑石製品や青磁などが出土した。

特徴

古代の墓制については、これまで良くわかっていなかった。しかし、本遺跡で円形周溝墓と土壙墓が近接した位置で発見され、本県では初見である。また、建物跡などとは出土区域が別れており墓域を考える上で今後の研究の指針となる。

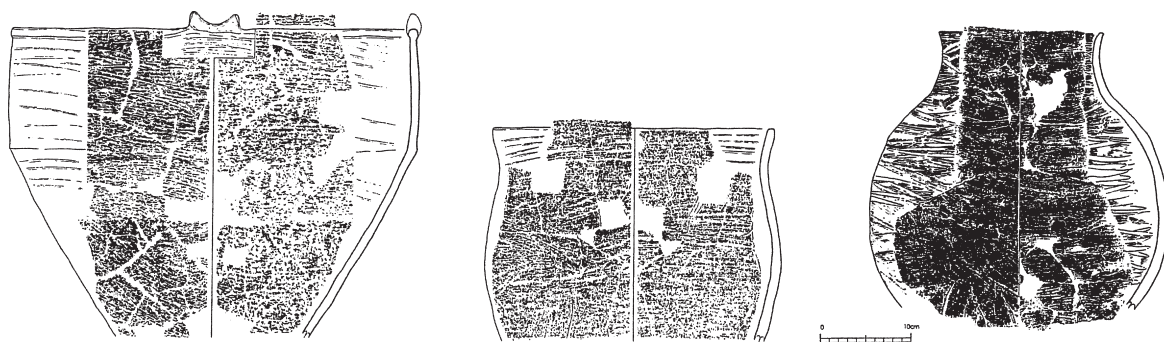
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

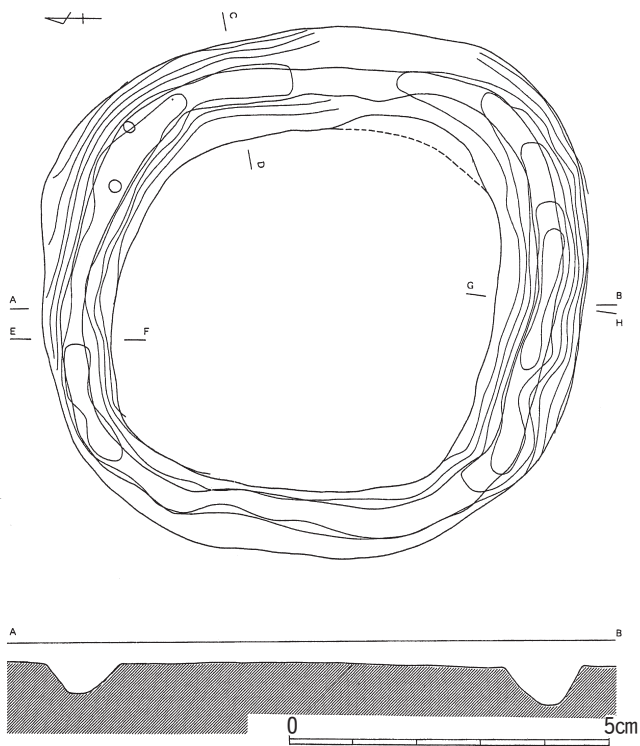
参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2002「計志加里遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』38

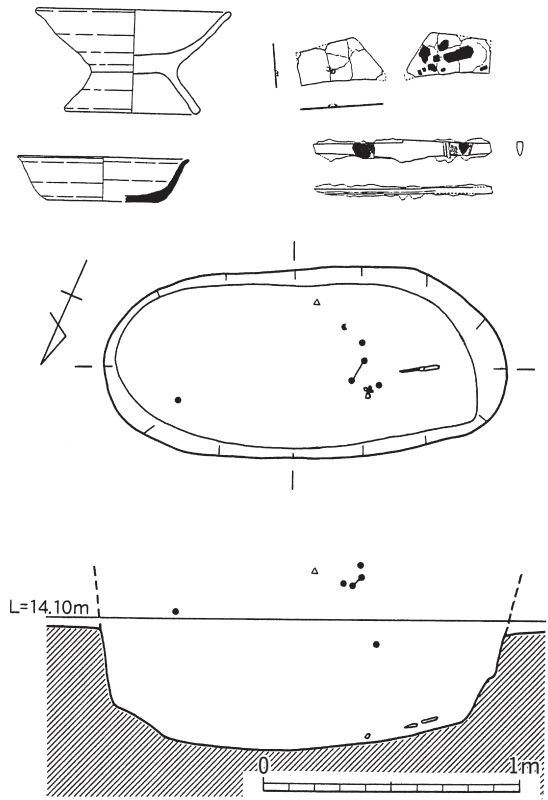
(宮田栄二)



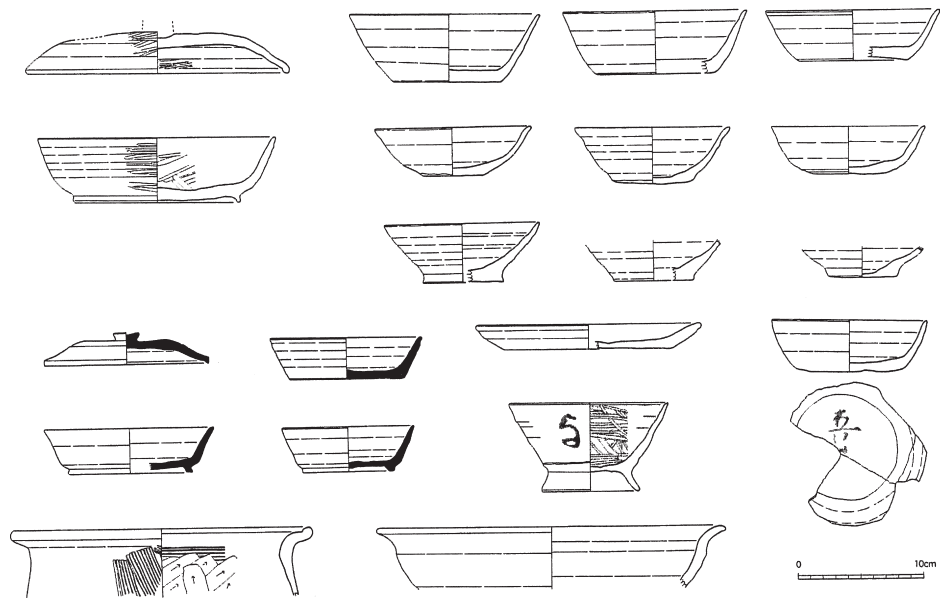
第2図 縄文時代晚期の土器



第3図 円形周溝墓と出土遺物



第4図 土壇墓と出土遺物



第5図 計志加里遺跡の出土遺物（奈良～平安時代）